

## 「レクリエーション指導」概念の変遷と展望

○千葉和夫（日本社会事業大学）

園田碩哉（日本レク協会研究所）

レクリエーション指導、レクリエーションワーク

### 1. はじめに

「レクリエーション指導」なる行為について、学会発表という学際的手段を用いその理論的見解をまとめたのは、これまでに本報告の共同研究者である園田碩哉の「レクリエーション指導の基本構造に関する一考察」<sup>1)</sup>のみである。この発表は、それまでの多くの抽象的論議に加えて、「レクリエーション指導」行為を「構造的」に捉えながらヴィジュアルな整理を試みた点でたいへん評価されるものと考ええる。

しかしながら、この発表から5年を経過した今日において「レクリエーション指導」なる行為は、従来の領域に加えて医療、保健、福祉、企業・労組、レジャービジネスなどの分野への多様な広がり加加速的に進行してきている。特に国際社会や高齢社会といった動向を背景としたレジャーの量と質の問題は、「レクリエーション指導」に対して新たな機能を要求してきているように思われるのである。

そこで、本報告では先に紹介した園田報告をベースにししながら今一度「レクリエーション指導」概念の変遷を次のようなステージで整理しながら、20世紀を見据えた「レクリエーション指導」の考え方を展望しておきたい。

- ①日本厚生協会のレクリエーション指導概念（戦前）
- ②「指導者検定規程」創設期のレクリエーション指導概念（昭和20年代）
- ③江橋や三隅のレクリエーション指導概念（昭和30年代）
- ④地域と職場レクリエーション領域におけるレクリエーション指導概念（昭和40年代）
- ⑤レクリエーション・ワーク論の登場（昭和50～60年代、平成年代）
- ⑥20世紀を展望して（平成10年代）

### 2. 日本厚生協会のレクリエーション指導概念（戦前）

日本厚生協会は昭和13年に設立されているが、戦争が激しくなるにつれて厚生運動という活動内容の表現も「慰安娯楽」（略して慰楽）とされ、レクリエーション指導者は「慰楽指導者」と呼ばれている。慰楽指導者は、修練所などを訪れて軍歌や童心行（ゲームのこと）の指導に当たっているのである。<sup>2)</sup>したがって、ここでのレクリエーション指導概念は、戦争で闘っている兵士や戦後で働く労働者への健全な慰安活動の提供であったと考えてよからう。

### 3. 「指導者検定規程」創設期のレクリエーション指導概念（昭和20年代）

昭和26年に「レクリエーション指導者検定規程」が制定され今日に至っている。そのときに規程を中心となって起草した白山源三郎が、月刊「レクリエーション」第1号で述べている文脈から<sup>3)</sup>、ここでのレクリエーション指導概念には、踊りや歌をレクリエーション的に指導しながら健全なレクリエーションの理念と実践を国民に浸透させていくという国民の「余暇善用指導」というニュアンスを感じとることができる。

### 4. 江橋や三隅のレクリエーション指導概念（昭和30年代）

江橋は、昭和36年に出版された『レクリエーションハンドブック』の「レクリエーション指導」という章の中で、「レクリエーション指導者は、参加者の興味や欲求、関心を正しく理解し、それを伸ばし、引き出すことを考えるべきであろう。」と述べ、参加者主体のレクリエーション指導概念を打ち出している。<sup>41</sup>

また、三隅は昭和37年に出版された『レクリエーション指導』の中で、「レクリエーションの指導とは、変な表現である」としながら、「人々がレクリエーションに対する興味を覚え、また湧きたたされ、生活の中に各自が自分なりにとり入れていくようになれば、それでよいと思うのである。」と、レクリエーションの生活化を導くようなレクリエーション指導概念を提起している。<sup>42</sup>

以上の両者に見られるレクリエーション指導概念は、レクリエーションの個別的な自由性を踏まえながら、その生活への導入を示唆している点で大きな展開が見られる。

#### 5. 地域と職場レクリエーション領域におけるレクリエーション指導概念（昭和40年代）

昭和47年、日本レクリエーション協会は「レクリエーション運動推進要項」を発表し、その中で、レクリエーション指導者が活動指導に終始することなく、地域の中のクラブに所属したり、あるいは育成したりするよう指針を打ち出した。このことは、活動指導の依頼を待っている指導者ではなく、地域住民のより楽しい生活づくりとしてのクラブライフを支援・育成するという新たなレクリエーション指導概念を提起したものと語る。

一方昭和38年からスタートした日本レクリエーション協会主催の職場レクリエーション指導者養成講習会（通称「レクリエーション学苑」）は、昭和40年頃からレクリエーション指導者を「レク・リーダー」という軽快な感じを抱かせる呼称に変化させている。

つまり地域のレクリエーション指導にはオーガナイザー的機能を要求したのに対して、職場のレクリエーション指導には活動指導により力点を置き、その概念が分化していったように思われるのである。<sup>43</sup>

#### 6. レクリエーション・ワーク論の登場（昭和50～60年代、平成年代）

日本レクリエーション協会が、昭和49年から行った「高齢者レクリエーション・ワーカー養成セミナー」を契機として、「レクリエーション・ワーカー」論議が活発になり、「レクリエーション指導」の基礎概念も検討されている。この背景には、社会福祉のソーシャル・ワーカー論や江橋らが昭和47年に著した『レクリエーション指導』におけるレクリエーション指導の図示、あるいは、田中が『レクリエーション指導教本』の中で述べたレクリエーション指導の中にカウンセリングやガイダンスをも含むという考え方が存在している。

以上のような過程を経て、昭和55年には日本レクリエーション協会が「レクリエーション指導者養成のための大綱」を発表し、その中でレクリエーション指導は「人々のレクリエーション自立への総合的支援活動」と定義したのである。<sup>44</sup>そして、その方法としては集団を介した支援、個人への直接的な支援、社会システムの整備が上げられている。

#### 7. 20世紀を展望して（平成10年代）

ある個人のレクリエーションの実現を調整・管理（広い意味で）するレクリエーション・コーディネーターやマネージャーという考え方が、レクリエーション指導概念を形成する中心的考え方になってくるのではないだろうかと思われる。

\*引用・参考文献は別紙にて紹介する。